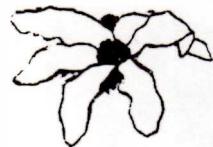


尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)

1993年 春 号

光、あふれる——ミズバショウと至仏山



(撮影・梅山久夫)

尾瀬の自然を守る会

尾瀬の一十年と私

後藤 允



後藤允 (ごとう・まこと)

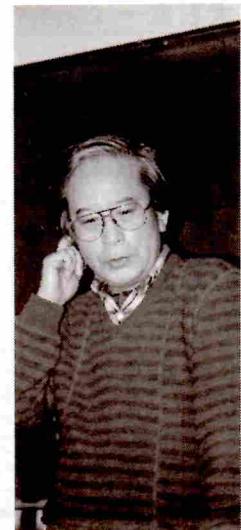
1936年(昭和11年)
群馬県沼田市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。毎日新聞東京本社編集局勤務を経て現在日本新聞協会紙面審査委員。著書に『尾瀬一山小屋三代の記』(岩波新書)など。

今日は尾瀬から何を考え、何を学んだかをお話したいと思います。平野長靖君が亡くなつたのが、一九七〇年でもう二十年以上たつていますが、ざつと二十年ということでお話をしたいと思います。長靖君が亡くなつたのは、ご存知のようにその夏に環境庁が発足した年であります。年表を操作してみると、その前の一九七〇年の国会が、一般に公害国会と呼ばれた年だったと思います。つまり、日本の高度成長の中でいろんな公害が出てきたけど、これは一つは住民市民の反対の声、もう一つはこれは非常に重要なことだが、公害を撒き散らすような企業は、存在し得ないということが身にしみて分かつた時期だと思います。七〇年の国会を境目に、エコロジカルな問題は、公害といふよりもっとさらに進んだ環境全般の問題になつてきたといわれていますが、これは経済の倫理であり、あるいは権力を持つ者の倫理であり、こう

社会的な認識があつて初めて環境庁ができる、平野君の声が形になつたといえると思います。これは決して個人の努力を否定する訳ではなくて、また時代の相といふか、時代の顔といふか、そういうものを一応認識しておかなければいけないと私は思います。といいますのは、環境問題や経済の問題をその時代の相からお話をされておきたいからです。公害の問題から認識がさらに進んで、環境全般にエコロジカルな視点を持ち始め、環境庁ができる、それから尾瀬を一つの典型とするいろんな運動が出てきた訳ですが、考えてみますと、そのころの私の環境についての認識は、誠にお粗末なものであつたとあります。これは時代の考え方もそうあつたでしようし、私の勉強不足もあつたでしょう。ただ、例えば平野君が大変苦しんでいるのをどうしたら良いんだろうかとか、木が切り倒され山肌が削られて行くのにどうしたら良いんだろうかといふ平野君の苦しみを見て、私は何が出来るかということをあまりしっかり考えなかつたんだなと思います。というのは、私どもは年代的にいうと政治的な闘争が随分あつて、当時は学生だから大衆運動を学生運動という形で随分かかわってきました。いろんな運動の中で、出動することが多かつたと思います。私自身、平野君もそうですが、絶望といふか一步退いた形にしてきました。そういうものが七〇年代にあります。自分達の気持ちをお伝えするためには、六九年が失望で終わ

り、次の七〇年の節目で何が出来るかということを、社会人というか市民として考えた訳ですが、これも大変うまくいかなかつた。肩すかしを食べた部分があるので、自分が社会にどういう形で参加するのか、自分に何が出来るのか、考えがうまくたちにならなかつた。これが七〇年であります。そういう大衆的な出動の経験が生かされてきた一九七一年、平野君が環境庁の大石長官に訴え出た時期ですが、私としては自然に対する認識もほんとに、大衆運動を起こすだけのエネルギーもなかつた。誠にお粗末な時代が七一年であります。ところが平野君は、彼も学生運動をやり、自治体活動をやり、あるいは北海道新聞で組合活動をやり、活動経験はあるんですけども、彼としてはそういうものを、すぐに運動に結びつけるにはかなり躊躇したと思います。というのは、まず尾瀬を、自然を守らなければいけないという今では当たり前の言葉かも知れませんが、その守らなければいけないという根拠がどうしても出てこない。当時の考え方は、ちよつとおかしいかも知れないが、例えば尾瀬ケ原のダム化の問題で水が苦か、電力が苦かという二者択一的な判断を迫られた時期があつたが、そうした問い合わせに対しては答えができたとしても、子供も自然に親しむことができる、あるいは足腰の弱った中高年に自然の恵みを享受出来るという言い方に対しても、しかし、やっぱり道は造っちゃいけないんだとはいっても、当時としては一般に認めてもらうための認識、倫理が構築できなかつた。こういう時期があつたと思います。しかし、平野君としては自分に響いてくるもの、今まであつた滝がなくなるとか、泉が枯れるとか、悲しみといふかそういう感じ方を一つの運動に持つていくというのに、大変なエネルギーを使つただらうと思います。

都会に住んでいる我々は誠に無責任で、一方、本当に申し訳ない言い方だが、亡びるものは亡びるんじゃないかという考えがあつたと思います。亡びるものは亡びていくんだろうということは認識できるが、亡びさせてはいけないんだ、という論理が出てこない。私はそういういいものを行動にすることができない



じうじした考え方でいたと思います。

その後、平野君は内海君の大きな助けを借りて

運動を広げていった訳です。

もう一つ反省をすると、平野君が大石さんのところに行つたが、自民党的な代議士のところに直接といふのは、今までの大衆運動と違うなと感じています。その夜、大石さんが平野君に言つたことは「君達も大衆運動をやつてくれ」ということです。その時の私のイメージでいうと、自民党的な代議士が大衆運動をやつくれというのではなく方だなと思つて、その辺が一つのきっかけになつたと思います。つまり、大石さんとしては自分はやるけども、やはり世論の喚起をやつて欲しい。そのためには、大衆運動的なものを華々しく打ち上げて欲しい。こういう言い方だつたんだろうと思います。こういう訳で道路問題はあのかたちに落ち着いたのですが、にもかわらず私としては風景の意味を考えみようと思ったのが、尾瀬にこだわっている一つの理由です。日本に限らず、風景論という考え方があつて、明治では志賀順行が『日本風景論』で風景の問い合わせをする考えて読み取ることにより、日本の国民の精神をどう形造るかということを書いてある。古典的な名著です。では尾瀬の風景というのは何なのだろうか、何でこんな気持ちを持たせるのかということを考えました。

かつて平野靖子さんに非常に印象に残つたお話を聞きました。ある青年が三平峠から下りにかかる、燧ヶ岳と尾瀬沼の小さなさざ波の立つ水面を見て、思わず泣いたというのです。靖子さん自身も、結婚する時に初めて三平峠を越えて、尾瀬沼の白砂に跪いたという話を聞いて、私はよく理解できました。

風景を見て涙を流したという、私自身はそれほど強い感銘を受けない、鈍感な性質であります。私がなりに理解できるという感じがしました。話はちょっと逸れますが、確かにその青年の方は高崎市出身で、亡くなられてヤナギランの丘の平野家の墓地に分骨されて納められている方だったと、それだけ尾瀬が好きだった方だったんだろうと思いますけど、そういう自然あるいは自然がつくる風景というものが、人間の感情に与えるもの、問い合わせるものを見てみようと思ったわけです。

環境保護の考え方方はそのアプローチが必要で、植物学者は植物学の視点からいうべきでありましょうし、いろんな各方面からの応援が必要ですが、私は素人だから自分の情に訴える風景の意識みたいなものを考えたいと思いました。平たくいえば、その風景を見ることにより、自分の内部の何かが喚起される、あるいはリフレッシュするクリエーションの一つの手段かも知れませんが、そういうものが大事なんだということを、どう論理化することが出来るのかと

いうふうに考えた訳です。それで毎日新聞の夕刊を借りて、七〇回くらいでしたか書きました。その中で考えたことは、風景が自分に与える感動の根拠は何なのかということが一つ、それから多少分かつて、続き物のタイトルを『尾瀬　人と自然』という形にしました。自分に対する物としての自然あるいは風景ではなくて、その風景の中にはいる自分を考える必要がある。つまり、生産活動あるいは社会的な存在である人間と風景が対峙するのではなくて、渾然一体という言葉が古くからあります。自然と自分との関係を余り緊張関係ではなくて、もう少し緩やかな形でありうるのかなという思いが漠然としていたのですから、そんな方向で話を書きました。

それからもう一つは、社会科学というか経済学の視点からも考えるのですが、自然の中に入る自分、人間というものが全く抽象的にある訳ではない。たとえば東京で働いていて、くたびれたなどという感じで尾瀬に行くこともあるし、平野君と話をするために行くなどもありました。しかし、そこには山

小屋という形で経済活動を営んでいる人がいる訳です。山小屋を営んでいれば、人間の一番基本的な原始的な形での収奪というのがあるだろう、こういふことが許されるのかどうかということを次に考えます。彼はその問題をあまり解決しないうちに行死してしまった訳ですけど、彼は尾瀬で山小屋を經營することによって、自然から収穫することをやらざるを得なければ、山小屋を辞めてもいいんじやないかと考えた訳です。

非常に厳しい考え方であるし、「二者択一的な考え方だから、どちらかに目をつぶつてどちらかを選ぶ」という形の選択です。そう考えざるを得ない背景の中には、彼の誠実さもあつたでしょうし、もう一つはレジマーの大衆化というか、非常に差別的な言い方になり、そういうわざるを得ない人達がどつと押しかける。こういう状況がずっと続いている。しかもそれが道路が出来ることによりさらに広がるだろうというのが、昭和四十六年の時点での彼を巡る環境だったと思います。

今にして思うと、どうも自然と人間をかなり激しい緊張関係で考えて、そういう考え方には何か耐えられないものだから、風景論的なアプローチになってしまふ。こういう弱いところがありますが、平野君がああいう声を挙げ、あるいは回りの人の助けを借りて運動の形にし、一定の成果を得たということのそこには何があったのか話したいと思います。結局、彼も風景が人の感情を喚起する、イメージを喚起するというか、エネルギーを与えてくれるというか、自然が人間の心に与える影響みたいなものを強く感じていた。今の言葉でいえば、非常にナインーブにそれを感受していたということがいえると思います。そういう感受性みたいなものは大人になると薄れていく訳ですが、今の環境破壊の状況の中で育つていく子供達というのも、そういう感受性が生き立てられないまま擦り減っていくだろう、そういうことに大変危機感を持っています。

(本稿は93年度尾瀬の自然を守る会での講演をまとめたものです。文責・牛木一朗)

大石武一（おおいし・ぶいち）

1909（明治 42）年 6 月 19 日、仙台市に生まれる。父・倫治（故人）は反軍思想の政治家だった。旧制仙台二中から旧制三高へ。植物学専攻を志したが、父の勧めで東北帝国大学（現東北大）医学部入学。卒後、助手、講師を経て 1944（昭和 19）年に助教授。1948（昭和 23）年初当選。1971（昭和 46）年 7 月、国務大臣・環境庁長官に就任。現在、緑の地球防衛基金会長、尾瀬を守る懇話会代表、尾瀬の自然を守る会顧問。

尾瀬までの道 3

緑と軍縮を求めて

二時間近く経つただろうか、待ち望んでいたお花畠に到達した。私たちの前に高山植物が一面に広がっていた。それはそれは素晴らしい。

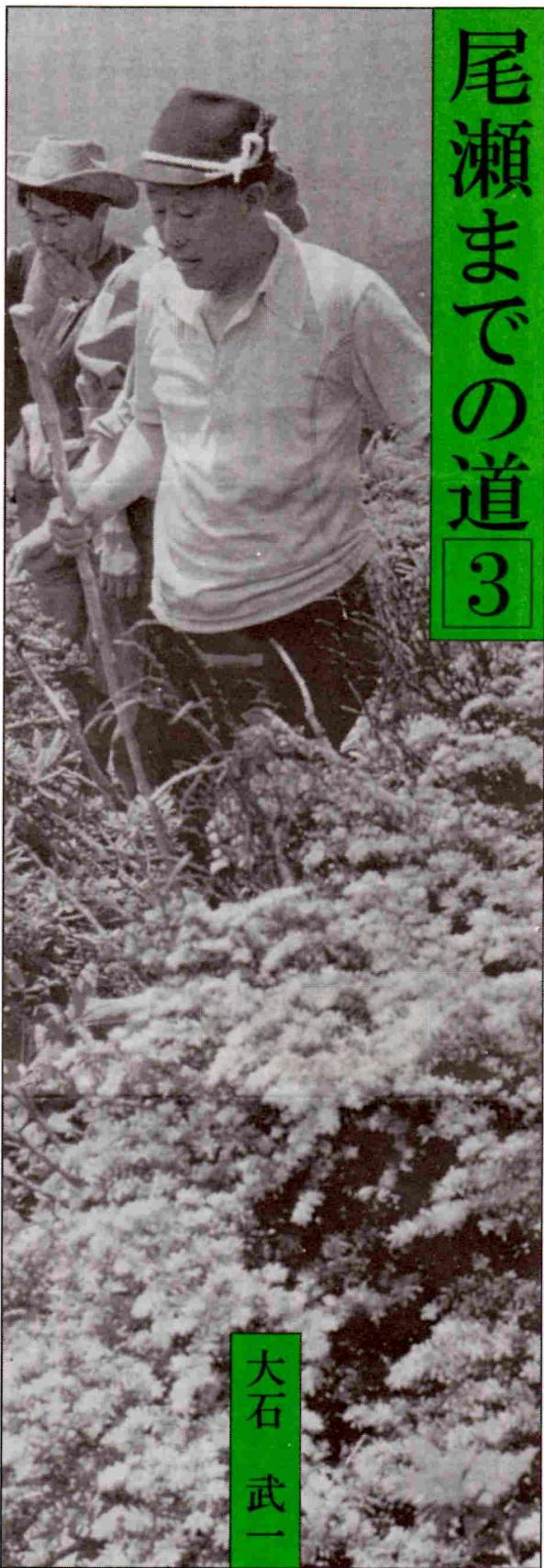
赤い唇を思わせる花のヨツバシオガマ、高貴な感じのミヤマウスユキソウやホソバヒナウスユキソウ、ハクサンイチゲ。そしてこれは初めて私は見たのだが、オゼソウもあった。緑色の白い小さな花。それはこの尾瀬にしか咲いていないといわれている。だいだい色の花のシナノキンバイ。空色の小さなタデやマリンドウ、白い花のチングルマ。

私は長年あこがれていたお花畠にやつて来た、という感動ひたつていた。タテヤマリンドウは立山連峰に登ったとき現地で見ていたが、こうした数々の高山植物のなかには

植物図鑑や写真でしか見られないものもかなりあった。

お花畠の近くで昼の弁当を食べた。下手に腰かけると花を潰すので、私は花の生えていない岩を探し回ってやつと座った。これは花を愛するものにとつては当然の行為だが、あとで聞いたところでは、これが同行した記者たちの心に響いたらしい。「大石は高山植物の名前も詳しいし、花を大切にする。自然を守るといつているが、あれは本当にやる気らしい」というのである。無意識のうちの私の振る舞いが、記者の信頼を得るきっかけになったのは幸せだったと思う。

至仏山の頂上は岩だらけだった。眼下に緑のじゅうたんを敷いたような尾瀬ヶ原が広がっていた。その向こうには燧岳がそびえていた。あまりの美しさに私は息をのんだ。下りは直下降の岩道だ。途中で夕立がやつてきた。みんなはカサをさしたり雨ガッパを



大石
武一

本稿は『尾瀬までの道／緑と軍縮を求めて』(昭和57年3月30日、サンケイ出版)から抜粋したものです。

(編集部)

かぶつたりして四十分ほど立ったまま休んだ。遠くで雷が鳴っていた。雨がやむと尾瀬ヶ原のうえに大きなニジがかかった。だれかが「尾瀬の自然までが美しい姿でわれわれに保護を訴えているようだな」とつぶやいたのを私は聞いた。

下りは岩がごろごろしているところを、両手で岩をつかみながら降りていった。ヒザががくがくして痛くなつた。

岩は雨にぬれて、滑つた。あとで、新聞社のカメラマンが写してくれた写真を見ると、護衛の人が私の尻を下から支えている場面があつて苦笑した。格好は悪いが仕方がなかつた。

夕方、尾瀬ヶ原に面した山の鼻小屋に着いたときはホッとした。さすがに疲れて階段を四つんばいでのぼつた。記者の諸君と一緒に風呂に入った。片品村の大竹竜藏村長が来て、私の腰を一時間ほどもんでもらつた。私より年配の村長さんもんでもらうのはあいすまないと思ったが、あのときは仕方がなかつた。おかげで翌日も足の痛いもせずに歩くことができた。

「この道路、必ず止める」

翌日の七月三十一日も天気はよかつた。ひ

ろびろとした尾瀬ヶ原のなかを、木道をたどりながら歩いた。レンジャーやボランティアの協同でゴミがほとんど見当たらないのはうれしいことだった。環境保護はまず国民一人一人が、自分の身の回りをきれいにすると同時に、ゴミを捨てないこと、ゴミを見つけたら進んで拾うことからはじまると私は考へている。尾瀬はその点では理想に近い状態にまでなつていた。それだけに、その近くに観光自動車道路を造つていいものだろうか――。

尾瀬ヶ原ではニッコウキスゲの花はもう終わりかかっていた。しかしキンコウカはいま

を盛りと咲いていた。黄色いアヤメのような小さな花が美しい。水辺のリュウキンカの花はもうとっくに終わっていた。

ミズバショウも大きく育つて、その葉が一メートルも伸びていた。ミズバショウの白い花は美しいが、そのあとの大さく伸びた姿はいただけないとと思う。案内してくれた日光国立公園事務所尾瀬駐在のレンジャー中島和君の話だと、北海道ではこんなに大きくならないという。尾瀬で大きくなるのは、汚染によつて窒素分が多くなつて、富栄養化現象が進んでいるせいではないかという。尾瀬のオーバーユースのせいかもしれない、とすると将来なんらかの対策が必要になるだろう。

尾瀬ヶ原を歩きながら、平野長靖君に尋ねたいことがたくさんあつた。だが、彼はいつも一行の一番後ろから、長靴を履き、雨傘を持ってとぼとぼ歩いてきた。決して私のそばに来ようとはしなかつた。私が、「おーい、平野君」と叫ぶととんできたが、話が終わると、また後ろの方へ下がつていった。平野長靖君とはそういう男だった。控え目で、決して自分が今回の私たちの視察の口火を切つたことなどを誇らしげにいう人ではなかつた。

第二長蔵小屋を通りすぎると原生林の中にいる。とたんに道は急になり、マクラ木を敷いた木道が上へ上へとつながつてゐる。尾瀬沼は尾瀬ヶ原より二百メートルも上のところにあるのだ。そのころはまだ尾瀬沼には渡し船があつた。それに乗つて対岸の長蔵小屋に行き、近くの福島県檜枝岐村がつくつた国民宿舎に泊まつた。

夜、国立公園のビジターズセンターで地元の人々と話しをしたあと、長蔵小屋でイロリを囲んで居合わせた登山者たちと話し合つた。みんなが口々に、「大臣、みんなで尾瀬を守りましよう」と訴えた。いま私の手元にその

ときの写真がある。若い男女の登山者たちに交じつて平野長英さん、長靖君親子の姿も見える。翌朝、つまり八月一日の朝、私たちは尾瀬沼の沼沿いの道を歩き、問題の三平峰へと登つていった。三平峰に立つて、改めて工事そのものによる自然破壊のひどさに立ちすくむ思いであった。三平峰の登り口の一ノ瀬の茶店のわきには赤いベンキ塗りの鉄橋ができていた。巨大なブルドーザーが山肌を削り、チエンソーや森を切り倒していた。パラストが敷いてあり、舗装寸前の状態にあつた。峰の途中の岩清水も、水はまだ出していたが、周りに石を積んだりして自然の姿はなかつた。

こんなところに道路をつけて車を走らせたらどうなるか。近くに駐車場を造つてそこから遊覧バスに乗つた団体客たちがぞろぞろ沼へ下りていつたらどうなるだろうか。繊細で優美な尾瀬の自然風景はひとたまりもないだろう。

私は自然破壊のひどさに自分の体が傷つけられるようないいがした。

これはどんなことがあつても道路は止めるぞ、と私は心にひそかにきめたのだった。三平峰からふもとの一ノ瀬の道を下りながら、平野君を呼んで周りの人人に分からぬようく声でいった。

「この道路は必ず止めるからね」といふと彼はひとつと「ありがとうございます」といつて、かすかに頭を下げるとまた列の後ろの方へ下がつていった。

一ノ瀬の茶店のところで、しばらく休んでから、私どもは車の待つてゐる大清水まで歩いていった。

あの日から三ヶ月後に、その一ノ瀬の茶店からわずか百五十メートル三平峰に寄つたところで、平野長靖君が雪の中であつて亡くなつた。私どもは車の待つてゐる大清水まで歩くことは、思いもよらぬことだった。



総会でいさつする内海代表

財団できても活動必要

93年度総会で代表が表明

尾瀬の自然を守る会の93年度総会は一月二十四日午後一時から、東京・世田谷区の東京農大一高生物教室で開かれ、多数の会員が出席した。なお午後二時からは後藤充氏の講演「尾瀬の二十年と私」が行われた（二・三ページ）。

定刻、内海代表がいさつに立ち、幹事の一部変更を提案。その理由として次の二点を挙げた。

①事務局は会を結成して十二年を経たが、いまだに居候している。二十五年をめどに独立するため、プロジェクトチームをつくりたい。

②この種の団体の仕事はハードで、長く続けていると疲れがくる。職業の都合などで選手交代も必要になる。そういうことを繰り返してきたところが、今回は地元の行

なればならない問題の一つに、群馬、福島、新潟の三県知事による保護財団設立の件がある。我々の三年前の提言もあって、環境庁は入山料問題や汚水処理問題などを解決するため、財団をつくりたいとの意向をもっていた。当時は地元からの反発などもあって、進展しなかつた。

次いで児玉事務局長が今年度の活動計画の説明を行い、主な活動項目として次の三点を挙げた。

①保護財団の設立の動きに

対応していくかが重要。三県

知事サミット以来、県のレベルではいろんな動きがある。

②この活動は依然として必要だ。今後、財団とどうかかわっていくか検討していく必要がある。

そのための財団ではなく、教

奥鬼怒林道と平野長蔵

下

京極 實

話しは全く変わるが、長蔵の没後、つまり終戦後に尾瀬沼の水の利用について、話し合いが行われた。東電はもともと沼の水を尾瀬ヶ原に落して発電する計画だったのだが、この話は断念していた。しかし東電は電力事情が悪化してきたので、何とかして尾瀬沼の水利用を実現したく、沼の水をトンネルで片品川に落すことを計画した。

そこで東電は昭和二十二年に四十名ほどの

関係者を今の長蔵小屋に集めて、その諮問会を行った。当時、長蔵小屋主は、二代目の平野長英氏になっていたが、このとき多くの人たちからいろいろな意見が出されたらしい。しかし最終的には、「自然破壊を最終限度に止める」という条件付きで、多数決をもって可決されたのであった。最初、反対側には、

かくして尾瀬沼は、東電の方針に従い、三平峠の西手に水トンネルが掘られて、これに通水が行われたのは、昭和二十五年のことであつた。この水トンネルによって、尾瀬沼の水位は、一メートル高められ、そして冬の水位は平水時の二メートル下まで低められたので、尾瀬沼は周囲が四・三平方キロに広がつ

植物学者の武田久吉博士などもおられたが、最後にはこの武田博士も「尾瀬沼には見るべきほどの植物なし」との判断に立たれたようであった。このようにして、この話し合いが可決されたとき、小屋主の平野長英氏が涙して二階から降りて来られたと聞いている。長英氏としては、自分が現に住んでいるところだけに、このような話し合いの結果には納得できなかつたのである。

かくして尾瀬沼は、東電の方針に従い、三平峠の西手に水トンネルが掘られて、これに通水が行われたのは、昭和二十五年のことであつた。この水トンネルによって、尾瀬沼の水位は、一メートル高められ、そして冬の水位は平水時の二メートル下まで低められたので、尾瀬沼は周囲が四・三平方キロに広がつ

平野長蔵は昭和五年八月二十日に病で没し、後継者平野長英氏も昭和六十三年一月十八日にこの世を去つて「ヤナギランの丘」の墓地に眠つている。ちなみに同所には、武田久吉博士追慕之碑が平野長英氏によつて建てられていることは、ご承知のことと思う。

（終）

て、古来から有名であった「ツセーのスナップー」や「弁天岩」などが水面下に没してしまつたのである。冬の結氷期に尾瀬沼を見て、も、全くわからないことであるが、張り詰めた氷の下では、これらの様子がわかるはずである。こうして、日本海に注ぐべき沼の水が反対側の太平洋に注ぐことになつたのである。交通機関が著しく発達した今日から見ると全く考えられないことであろうが、当時は終戦後早々の混乱期でもあつたので、止むを得ないことがあつたのである。

まつたのである。冬の結氷期に尾瀬沼を見て

しまう

のである。

まつたのである。

1993 年度幹事役割一覽

幹 事			
代 表	内海 廣重		0427 - 45 - 5963
事務局長	児玉 芳郎	会報編集	0473 - 58 - 2922
会計監査	長谷川義孝		03 - 3700 - 8759
総務部	青木 安弘	庶務：会報編集	03 - 3415 - 2991
	大中 瞳夫	庶務	044 - 955 - 7485
	高橋 喬	会報編集	043 - 228 - 1448
	當間きくい	庶務：会報発送	03 - 3619 - 1181
財務部	椎名 宏子	庶務	03 - 3581 - 0321
	岸 好人	会計	03 - 3704 - 2393
	松田美代子	会計	03 - 3228 - 0473
	河内 輝明	指導員養成	0429 - 45 - 8485
指導部	武 繁春	指導員養成	045 - 752 - 0083
	平井 敬治	入山指導	0279 - 56 - 2249
	町田 安正	外部団体等の研修	0424 - 63 - 1210
	波戸場秀幸	外部団体等の研修	0273 - 23 - 9302
普及部	狩谷 保	全修協	0463 - 92 - 1464
	有馬 進一	外部団体等の研修	0466 - 87 - 8922
	梅山 久夫	群馬代表幹事	0272 - 24 - 4645
	蜂巣 隆雄	群馬副代表幹事	0272 - 52 - 8398
群馬	清野 共子	福島代表幹事	0245 - 34 - 7808
	八巻 治子	福島副代表幹事	0245 - 57 - 7332

特別幹事

顧問

高井 昭	0270 - 65 - 3516	大石 武一	03 - 3711 - 6801
松村 幸雄	045 - 714 - 5174	門司 正三	0423 - 83 - 3194
坂井 崇浩	03 - 3447 - 1877	馬場 篤	0242 - 54 - 4740
飯塚 忠志	0272 - 66 - 2543	高野 均	0276 - 82 - 0234
鎌木 利博	0423 - 43 - 7824	金田 平	045 - 301 - 4408

尾瀨自然保護指導員名簿（50音順）

新指導員は12名
九三年度の幹事選出の後、
第14期尾瀬自然保護指導員の
修了証授与式があり、次の十
二名が新たに指導員（候補）
として終了証を受けた。（敬
称略）
長沢好三（公務員）新潟県
新井市▽宮川好雄（会社員）

郡山市▽高橋登・渋川市▽永島歎(会社員)埼玉県吹上町▽福原誠志・郡山市▽萩原富三(団体職員)沼田市▽川島真二・前橋市▽松村輝敏(公務員)群馬県勢多郡粕川村青木賢治・渋川市▽木暮一行・前橋市▽田中志朗(会社員)太田市▽高畠耕一郎(教員)大阪府吹田市

